









日比谷駅の長い地下通路を抜け出ると、光の城があった。東京ミッドタウン日比谷―――。 2018年に竣工されたこの城は、おそらく、夜にこそさらに映えるように設計されたのではあるまい か。師走の澄み切った空に浮かぶ月との対照は、美しいという言葉以外の言葉を決して寄せ付け ない。

一方、である。光の城の向かい側、すなわち日比谷公園は、何とも言えない濃密な闇に包まれ ている。それはフェルメールの絵画のごとく、向かい側から絶え間なく降り注ぐ光が闇の密度をぐっと 高めているからなのか。それとも、数々の歴史的・文化的な出来事を堆積させてきた日比谷公園 自体が、もともと濃密な闇を備えているからなのか。そんなことを考えながら、光と闇のちょうど境目 にある歩道を行った。

クリスマスマーケットの会場が近づくにつれて、人間が多く集まる時特有の熱気がどんどん高まって いくのを感じる。入口まで来てみると、指定された入場時間を待つ人々の長蛇の列。普段であれ ば、確実に踵を返してしまいそうな長蛇の列であったが、この時ばかりはなぜか、長蛇の末端につく ことを厭うどころか、むしろ進んでくっついていったような気がする。それは、決して同僚と一緒だったか らという訳ではない。長蛇の列につくことを厭わなくさせた何かが、おそらくそこにはあった。

デポジットのマグカップを受け取って、クリスマスマーケットの中へと入ってゆく。ろうそく立てであるとい う、クリスマス・ピラミッド。香ばしい匂いを放つドイツ・ソーセージと、甘い匂いを漂わせるお菓子のオ ーナメント。個性的な屋台の数々。東京の夜の真ん中に、クリスマスを楽しむドイツが確かにあっ た。















日比谷公園の大噴水を中心として、放射線状に店店が展開している。その中を、たくさんの 人々がゆっくりと回遊するのだ。まるで夜の光の海の中を進むイワシの群れのように。

数えきれないくらいたくさんの人々が回遊しているのだから、なかなか前に進めない。しょっちゅう肩がぶつかりそうになる。物を買うにも食事をするにも時間がかかる。けれど人々は、そんなわずらわしさを厭うどころか、むしろ楽しんでいるようにさえ見える。

アクリル板を挟んだ対面。マスク越しに交わされる言葉。手を伸ばしても届かない場所に立つこと。私たちはこの数年で、すっかり人との距離を見失ってしまっていた。人と人が関わることのわずらわしさはぐっと減ったけれども、人と人が関わることのあたたかさもぐっと減ってしまった。おそらくこのクリスマスマーケットの参加者たちは、恐る恐るではあるけれども、人のわずらわしさを思い出すことで、人のあたたかさを取り戻そうとしていたのではあるまいか。そのきっかけが、このクリスマスマーケットであったというだけのことであろう。

人は今までも、そしてこれからも、きっと人と関わることなしに生きていくことのできない存在であることだろう。だからこそ人は多くの文化を創り出し、共有し、伝承してきた。要するに文化とは、人が人と関わるためのただの口実に過ぎないのだ。

そういえば、1987年に俵万智は、こんな言葉を紡いでいたっけ。

「寒いね」と 話しかければ 「寒いね」と 答える人の いるあたたかさ

2021年のクリスマスが、いまここにある。

国語科教諭 藤崎央嗣

